

れ、修理工場、自動車、部品などの中国側への引き渡し、修理の知識の中国側への伝授も急ピッチに行われ、中国からめぼしい技師・技手への巧みな言葉をもつての残留勧誘が激しくなりました。これに応じた人も何人かいたようですがその後の様子は分かりません。

抑留中、一番苦労したのは医療品の不足で特にキニ―ネ等の欠乏には苦しみました。

無事復員した時、家族は皆無事なので、抱き合っていました。帰国してからしばらく農作業を手伝っていました。三年後に天麩羅油製造の会社に職を得て定年まで勤めました。現在も大病もせず、元気で暮らしています。

弾部隊 芷江作戦

山形県 今田 榮

(旧姓 松田)

私は山形県北村山郡山田村で生まれました。生家は両親と長兄、私、弟、姉一人の六人家族で、米作と養蚕の農家でした。私は現役志願ですが入隊まで農業を手伝っておりました。志願の理由は父親が近衛兵であったことと、長男が近衛兵として長く軍隊に勤めていた(下士官)のですが北支から除隊してきたこと、さらに当時の軍国主義から徴用に取られるくらいなら早く志願しろと父や兄に勧められたことです。

昭和十八年五月に一般徴募の徴兵検査と一緒に受験、見事一発で合格し喜んでいたら、二カ月後の七月に兄が弘前の連隊に入ることになり、追いかけるように私の入隊通知が八月十五日に来て、翌月の九月五日に山形連隊(北部第十八連隊)に入隊することになり

ました。

男手がなくなるといふ我が家の農業の急変に父親が困ってしまいました。弟は私と八歳違いの小学生ですから頼りにならず、泣きの涙で私の入隊を送ったと思います。

昭和十八年十二月に一期の検閲が終わり、直ちに下士候の試験に合格し、教育隊に行くものと張り切っていたのですが一向にその話がなく、一般兵と同じ教育訓練がズルズルと続きました。

内務班は生死・苦勞を共にする軍人の家庭ですが、あら探しの名人の万年一等兵と言われる程度の低い古年兵が一人いて、万事文句を言っっては、ビンタも手で殴られるのは良い方で帯革ビンタの雨、初年兵同士での対抗ビンタもやられました。

まったく苦しい内務班での生活でした。兵営生活の目的は「軍人精神を涵養し、軍紀に慣熟せしめ、強固なる団結を完成するにあり」と「軍隊内務令」にあり、絶対服従、上官の命令は天皇の命令であると教えられ、死は鴻毛よりも軽しと諭され、軍紀厳しい中で

の訓練に次ぐ訓練に明け暮れました。

その憎い万年一等兵も後日中国の野戦に私等と一緒にいったのですが、なんと急に初年兵の私に優しくなり、仏様に変身したのにはびっくりしました。実戦になると弾丸は前からだけでなく、後方からも飛んでくるのだと聞いたことがあります。

昭和十九年七月になりますと第四十七師団（弾）の編成が始まり、私等現役兵の他に召集兵が入ってきました。その中に朝鮮出身者も五人入ってきました。第四十七師団歩兵第九十一連隊第三大隊第十一中隊安達隊に編入。「弾」師団は南方用として編成した甲装備の優良部隊だそうで、戦局が厳しくなり南方輸送が絶望になったので中国戦線に転用になったそうです。

ですから敵に恐れられ、兵隊一人にいくらと懸賞金がかけられていたという話です。

昭和十九年十一月二十三日、山形県の新庄のそばの大石町駅を出発、そして下関を出航したのは二十八日の早朝、荒れた対馬海峡を渡り、夕方釜山に着く。以後、奉天、安東、山海関を経て北支に入り、北京、順

徳と軍用列車の有蓋貨車に乗り支那大陸を南下しました。

十二月十一日、漢口北方の順徳に到着、釜山以来はじめての下車となり城内の仮兵舎にしばらく滞在することになりました。後で判ったことですが、この先の黄河の鉄橋が米軍機により爆破され輸送ができなくなったために滞在になったとのこと。

滞在中に朝鮮出身の初年兵二人が逃亡し、夜間、非常呼集がかかり搜索したが見つからず、数日後、警備隊に発見され部隊に連れ戻されてきました。その二人は終戦まで戦線で活躍していました。

五日間の地上生活を終え、再び貨車に乗り込んで順徳を出発し、京漢線の新郷を経て黄河にさしかかりました。列車は最徐行運転で長さ五〇〇メートルの修理したばかりの鉄橋を夜間渡りました。夜の黄河は不気味でした。

この頃から昼間の空襲が激しくなり列車は夜だけ走るようになり、途中、停止、待避を繰り返しながらようやく漢口に着きました。ここでは全員貨車から降り

て揚子江を渡ることになりました。河幅が一七〇〇メートルもあり渡河船で十五分かるといいます。乗船場には鉄板の箱型船が並び、それを何段かつないで曳き船が曳いて行きます。渡し船の上は平らな鉄板で手すりなどないから、みんな腰をおろして座ったまま腕を組んでいました。

年が改まった昭和二十年一月四日、武昌到着。彈薬、糧秣の受領の使役中、空襲警報のサイレンが鳴り、近くの小高い丘に待避していますと、遙か上空で蜂の群れが舞うが如く飛行機が乱舞しています。太陽の光線で銀色にピカッ、ピカッと光りました。そのうち黒い煙の線を引いて落ちる機があり、皆で喜んだ(笑)その一瞬、日の丸がチラッと見え、スーッと揚子江に消えていきました。高射砲が盛んに打ち上げられるのですが届きません。私達は茫然と見上げるばかりでした。

実戦の空中戦は以後見ることはありませんでした。武昌に着いたのですが米空軍の空爆がますます激しくなり、列車による輸送が困難になり、これから先は徒

歩行軍になり二〇〇キロメートル先の岳州に一月二十日着。五日間の滞在で再び行軍、長沙を目指しました。

これから先は敵が出没する地帯なので夜行軍です。六カ月前の第三次長沙作戦の激戦の跡が残されており、日本軍の戦車、トラックの残骸が無残な姿をさらしていました。長沙を通りぬけ湘潭、永豊と行軍を続け、湖南省、芷江作戦（湘西作戦）最前線に着きましたが、山形の大石田を出発以来六カ月が経っていました。

弾師団の第一三一連隊は先行して第二十軍の指揮下に入り、敵陣深く攻め入り、包囲されて苦戦中でした。第九十一連隊は救援のため夜行軍を強行していました。私の所属する第三大隊第十一中隊は連隊の先兵として芷江作戦に突入したのです。

五月十九日泥塘山の戦闘が開始されました。米式装備の敵は頑強に抵抗し我が損害は次第に増えてきます。敵迫撃砲の攻撃が始まりました。遠くでドーンという音と共に頭上をヒュルヒュルと飛来した砲弾が耳

をつんざく大音響と共に炸裂します。谷間一つ隔てた敵陣からチェッコ機銃が間断なく撃ってきます。

味方の陣地は松林の中にあり松の枝がバタバタ頭上に落ちてくるほど烈しい攻撃になりました。中国の夜は本当に真っ暗でした。夜間攻撃時の合言葉は「さる」と決められています。夜襲は足音を殺して藁々と進み、尖兵がストップしたと思ったら、途端に意味の判らない甲高い声となり、その合間にかすかに「さる」という声があったと思ったら山頂から一斉に撃ってきました。直ちに斜面に伏し、味方はこれに応戦せずじっと待ちます。そのうち敵の射撃も散発となり、やがて静まり返りました。

機を見て山頂目指して突撃し占領しました。その時、敵は既に退去した後でした。夜が明けて向かいの稜線は敵陣です。少しでも頭を出すと狙撃されます。白い服を着た人影が林の中に見え隠れしていました。米国軍事顧問の米人らしいと教えられました。やがて敵は谷を渡り、こちらの斜面を登り、接近戦となり、我が軽機は立ち上がり腰だめ射撃で防戦に必死です。

敵の銃火はますます熾烈さを増し、戦場は戦傷者が続出し混乱状態に陥りました。

五月二十日夜に移動して泥塘山を背にして右方向の屋根伝いに進み、顔公廟の山の斜面に散開し、蛸ツボを掘り戦闘態勢に入りました。正午頃、再び敵の攻撃が始まりました。今度は昨日と違い空からの超低空による銃撃です。時々曳光弾を発し、搭乗員が機から身を乗りだし、凄まじく撃ちまくってきます。とても地上にすることはできません。各自蛸ツボに入り身を隠すより方法はなく、それに呼応して迫撃砲とチェッコ機銃による乱射でした。

蛸ツボからソツと顔を出してみたら、我が陣地の後方の山の斜面に火の玉が落ちて一面に火の海になっていました。敵は重油を積み込んだドラム缶を空から爆発させ、山という山、谷という谷を燃えあがらせ、我が軍を全滅しようとしているのです。中隊主力が散開している場所らしく、兵隊が右往左往しているのが望見されました。

隊長は伝令兵の私に最前線の戦闘状況を大隊本部に

報告せよと命ぜられました。私は本部まで約六キロの道を敵弾の中、迫撃砲弾の炸裂する真っ只中を突っ走りました。山の斜面を這うように走り続けます、大隊本部へと……。

一時間ほど前に投下された火焰爆弾の後は、山は火の海のようなでした。倒れている兵の軍服に火が付いて黒焦げになっている者、まだくすぶっている数多くの兵たち。ほとんどの兵は目をあいたまま倒れている状況の中を、私は屍を飛び越したり這いつくばったり、ひたすら走り続けました。

地獄絵とはこのことだと思いました。私もいつまでの命なのか、自分でもわかりません。本部へ報告してから無事帰って隊長に報告し、そのまま戦闘を続けました。夜が明けて水を飲もうとしましたが水筒に銃弾の穴があいており、水は一滴も残っていませんでした。ちょっと間違えば私も腹部貫通銃創で死んでいたと思います。この戦闘で中隊の四分の一が戦死しました。

生き残った私達が担送患者の六人を仮包帯所に運び

込んだら、そこにはなんと衛生軍曹として偶然にも実の兄貴がいたのです。戦地で兄弟が会えるなんて、何と神仏のおかげかと思いました。あまりの嬉しさに涙を流して手を握りあつて喜びました。

こうした中、当時殴られた兵も殴った古年兵も、また敵しかった下士官も死んでいったのです。

内地の山形の野での訓練は何だったのか。歓呼の声で見送ってくれた祖国の人たち、涙で見送った家族。

この地獄絵は戦死した兵隊の家族にはとても話せないことのように思えてなりませんでした。

「万歳！」を叫んで死んだ兵など全くいません。負傷のため出血多量で息を引き取るまで、ほとんどの兵は家族の名を叫びながら死んでいきました。

召集兵の渡辺兵長は眉間に一発銃弾を受け、血だらけになって戦死。梅津伍長は腹部貫通銃創で戦死。その他多くの戦友が戦死あるいは受傷後の手当てができず死んでいきました。

そして五月二十二日、軍より作戦中止命令が下りました。夜行軍で永豊、湘潭、長沙と今まで来た道を今

度は逆に進みました。

八月十五日終戦を知らされ、長沙で軍旗を奉焼しました。皆整列した前で連隊長が火を付けました。皆泣いていました。

戦闘で九死に一生を得た兵隊は武昌地区に集結し、郊外で幕舎生活を送りました。昭和二十年十月二十四日、武昌を出発し、揚子江の川沿いを徒步行軍で湖北省黄冈に着いたのが十月二十七日でした。

その後、昭和二十一年四月二十八日まで、黄冈で民家に分宿し捕虜生活に入りました。栄養失調症と病気で多くの戦友たちが亡くなっていきました。黄冈城外の墓地に一つの墓穴を掘り、僧侶出身の飯坂中尉が「日本官兵之墓」と書いた墓碑を建て埋葬しました。

国府軍の管轄下で武装解除されたので、終戦後の生活は強制労働はなく予想していたより楽でしたが、食糧と薬品が不足したのが苦勞でした。民家一戸に一個分隊が生活しました。

現地人に漢方薬と称して齒ミガキ粉を保革油で練り、クレオソート丸を粉にして混ぜ、四角い紙の小片

を葉包紙にして与えたら葉効あらたかで非常に喜ばれました。そして御飯をたらふく御馳走になり、貧しい給与を補ったりしました。

現地人は塩も貴重品で煉瓦壁を中空にしてそこに塩を隠していました。日本軍と八路军が交代に徴発に来るのに備えて隠し場所を作っていたらしいのです。

所帯持ちの兵隊が死んだ後に祖国の遺族からの便りが届くことがありましたが、無事帰るのを待っている旨の内容には軍歌「戦友」の唄ではないが涙が出て全部読み切れませんでした。

米沢出身の人が戦闘で腕と足を負傷して後方に担送中、敵襲を受けて置き去りにされ、水田の水を飲んだら失神し、敵軍に担がれて重慶の病院に收容され、米軍医の手当てを受け、私等の帰国より二カ月程度遅れて帰国したそうです。うちの中隊長も米沢出身でしたので帰国早々その兵隊の留守宅を訪ね「お宅の息子さんは〇〇で名誉の戦死を遂げられました」と報告して仏前に線香をあげて帰ったところ、二カ月後に本人が帰ってきたので何とも困ったそうです。本人の話に

よると重慶ではいろいろ尋問されましたが「ワカラナイ、ワカラナイ」で通したとのことでした。

昭和二十一年四月二十九日、湖北省黃岡出發。船で揚子江を下り南京、上海と移動し、五月二十九日上海を出航、五月三十一日博多に到着、六月三日上陸。六月五日懐かしの我が家に帰りました。

兄も無事帰り家族無事を喜びあいました。その後家族揃って農業に励み、昭和二十七年結婚し、姓が「今田」に変わりました。

あれから五十二年余り、泥塘山、顔公廟の戦友たちの屍は、今どうなっているのでしょうか。やはり草むす屍となつて、今もそのままなのでしょうか。無念の涙で死んだ戦病者達、あの魂は祖国に帰っているでしょうか。あの終戦のドサクサから、やっと這い上がり生きて来た人たちも皆苦勞して七十歳から八十歳代の年齢になっていることでしょう。

最後に祖国日本の上を踏むことなく戦地でなくなつた戦友と、復員後亡くなった戦友の御冥福をお祈り申し上げます。